

「空・寂・淨に滞る」ということ

李通玄における菩薩行と『般若経』

伊 藤 真

唐代に独自の華嚴思想を説いた居士・李通玄（六三五—七三〇年頃）の著作には、「淨」「寂」「空有」「仮」「權」「功」などに「滞る」ことを戒める言説が多数みられる。今回はその中でも「寂」「淨」に「滞る」ことの内容を検討し、併せて「空」に「滞る」ということを見る。この作業を通して、李通玄による『般若経』の理解・位置づけを探り、彼が重視した菩薩行の在り方との関連から、李通玄が『般若経』の空觀を重視しつつも、それを乗り越えようとした、その思想的課題を明らかにしたい。

一 「寂に滞る」の用例

まず、「寂に滞る」という用例を見てみよう。

（一）欲_レ学_二仏菩提_一者、如_レ此通融不_レ修_二一行_一。若_レ偏修_レ理、即_レ滞_レ寂。若_レ偏修_レ智、即_レ無_レ悲。若_レ偏修_レ悲、即_レ染習便増。若_レ但修_二大願_一、即_レ有_レ為_レ情起。菩薩於_二此衆行_一不_レ去_レ不_レ留。以_二法性均融得_レ所_一、即得_二以_レ定慧力_一善觀_レ察_レ之_上。（『新論』卷九。大正三六、七七八下）

（二）差別智由_二以_レ根本智_一觀察加行力_上修成。若不_二一人以_二加行觀察力大願力_一、即_レ根本智_レ滞_レ寂。声聞同乘故無_レ有_レ用也。（同、卷二五。大正三六、八八八下）

（三）以_二是三乘或滞_レ寂、或但生_二淨土_一、為_レ無_二廣大願起_レ智、成_二滿法界虛空界等衆生大悲_一故。或云_二以_レ願留_レ惑住_二於娑婆_一者、但得_二法空無相菩提_一非_レ得_二普光明智_一故。……又此八地菩薩無功之智現前、猶恐_レ滞_レ寂、以_二第八波羅蜜_一防_レ之。……又十方諸仏以_二三加七勸發_一令_二智不_レ滞_レ寂_一故。（同、卷二六。大正三六、九〇一下）

（四）及第十灌頂住及第十法雲地、總須_二諸仏灌頂加持_一故。若不_二加持_一、或時滞_レ寂、或不_レ了_二仏境界_一故、無_二能自進_一。……此是童真住明_二創初童蒙入_二真無功智之界_一……明_二此位無功智現_一、恐_レ當_レ滞_レ寂、以_二大願門_一興_二其智用上_一故。（同、卷三五。大正三六、九六三下）

ここで気づくことは、「若_レ偏修_レ理、即_レ滞_レ寂」「根本智滞_レ寂」「無功之智現前、猶恐_レ滞_レ寂」「令_二智不_レ滞_レ寂_一」などと、「寂に滞る」とことと「理」「智」とが結びつけて語られていることである。

では李通玄が言う「寂」とはどういうことだろうか。

それは、一つには三乗の者が得る「法空無相菩提」である。さらに「声聞同乗」と言われていたとおり、例えば「為二乗人滅^レ識証^レ寂住^レ寂無知^レ」(『新論』大正三六、七三六上)など、二乗が証し、住する境地でもある。それは「声聞觀^レ苦集二諦、深生^レ厭離^レ。…知^レ身空寂。隨^レ空寂法、智滅身亡、不^レ生^レ悲智^レ。名^レ之為^レ滅。以^レ此滅處^レ名為^レ涅槃^レ。」(同、七五五中)と言うように、この苦の世界に深い厭離の思いを起こし、空寂の境地を趣向するものである。そして『華嚴經』が説く菩薩にあつても、「智」(≡李通玄が言う根本智、空慧)が照らし出す「理」の世界は一切皆無、無自性空の世界であり、そこに偏すれば「無^レ悲」となり、二乗、三乗と同様に「寂に滞る」ことになる。

しかもそれは、菩薩の修行の階位において「無功智」の顯現する第八住や第八地に至つてもなお、大願を發起してその「智用」である大慈悲を行じない限り「寂に滞る」恐れがあり、第十住、第十地においてさえ、諸仏の加持を得なければ同様に「寂に滞る」恐れがあるというほどに、根深いものと李通玄は見えていたのである。

二 「浄に滞る」の用例

次に「浄に滞る」の用例を見る。第一の用例は『維摩經』と『華嚴經』の十種の異なる点を論じた箇所だが、今はその

「空・寂・浄に滞る」ということ(伊藤)

違いは論じない。第二、第三は十地中の第八不動地の菩薩を論じた箇所であり、第四は十住、十行、十廻向の菩薩の修行の階位を論じた箇所である。

- (一) 四所設法門對根別者、此維摩經對二乘根、令^レ廻向菩薩菩提^レ入^中大乘^上故。又對大乘中滯^レ淨菩薩悲智未^レ滿者令^レ進修故。『新論』卷一。大正三六、七二四上⁽⁴⁾
- (二) 像^レ此位菩薩無功智現前猶有^レ無生法樂智淨習氣。以^レ諸仏三加七種勸發^レ令^レ憶^レ本願、方始隨^レ智行^レ廣利^レ衆生、十方世界度^レ生無限。此乃如來設^レ教防^レ之、防^レ護初發心之際円融悲智。非^レ獨是此位方有^レ滯^レ淨之功。是一即一切中防護也。(同、卷一二。大正三六、七九五上)
- (三) 為^レ此地智増、以^レ智體本淨、以^レ願興^レ行、転更自在。若不^レ以^レ願起^レ智、恐^レ同^二三乘^一。以^レ願防^レ之、不^レ令^レ滯^レ淨。(同、卷二七。大正三六、九〇四下)
- (四) 以^レ彼十住十行位中出世智悲之行猶多^レ滯^レ淨、以^レ十廻向^レ和^レ融世出世間真俗二智、使^レ恒處^レ世間、行^レ大慈悲、智無^中淨染^上。(同、卷三八。大正三六、九八四下⁽⁵⁾)

ここでは「浄に滞る」ことが「悲智」の円満・円融の対極にあるものとして語られている。そして「智」を得ても「願」を發起し利他行へと進まなければ二乗と同じであるとして、先の「寂」と同様、「智」は「悲」と対置され、「浄に滞る」ことと結びつけられている。さらに、「出世智悲之行猶多^レ滯^レ淨」という十住・十行位に対し、十廻向位を「和^レ融世出世間真俗二智」「恒處^二世間^一」とし、ここでは「智」が

「空・寂・淨に滞る」ということ（伊藤）

開顯する「淨」なる境地の出世間的、脱俗的な側面が一層鮮明になっていると言えるだろう。

李通玄は初發心時に發起される「智」（根本智・空慧）を菩薩の行道の根幹を成すものとして重視した。⁽⁶⁾それが「寂・淨に滞る」とこととこれほど強く関連付けて理解されているのはどういふことだろうか。

三 『般若經』の位置づけと「空に滞る」こと

李通玄が重視し、初發心時に開顯されるとした根本智・空慧は、「第六波羅蜜空慧滿」（『新論』大正三六、七七七下）とされる。言うまでもなく六波羅蜜とその極まりである般若波羅蜜は『般若經』⁽⁷⁾の宣揚するものであり、李通玄にとっても『般若經』が説く空や空觀は彼の華嚴思想のベースになっている。⁽⁸⁾さらには『華嚴經』自体、『般若經』の空思想を繼承しつつ超克しようとした側面がある。⁽⁹⁾では、李通玄は『般若經』自体をどのように位置付けていたのか、ここで改めて確認してみたい。

李通玄は『新論』玄談部分の「明依教分宗」の十宗、「明依宗教別」の十時教において諸經典の教説や宗旨を分類、判別する。⁽¹⁰⁾そこで『般若經』は前者では「第三般若經為說空彰實為宗」、⁽¹¹⁾後者では「第二時說般若破有明空教」とされる。

（一）第三般若經為說空彰實為宗者：為說空教破所執著故、般若經中說十八種法、世間三宝四諦三世等、一切皆空、空亦空。（『新論』卷一。大正三六、七二二上・下）

（二）第二時說般若破有明空教者、既說小乘實有令成軌範制其身語意得住善法、則說生空等觀、方說法空教。破彼繫著、漸向法身。（同、卷三。大正三六、七三六上）

『般若經』は「有」を破し、「一切皆空、空亦空」を開顯するといふ。これに対して李通玄は、第三時として『解深密經』について述べる中で、「第一時小乘純有教」と『般若經』の教説について「為於前空有二教和會、令_三迦見者不_レ滯_三空有二門。為_三不空不有教。」（『新論』大正三六、七三六上）と saying。つまり『般若經』に偏すれば「空」に「滯る」（小乗教）は「有」に「滯る」というのである。この点、「空を空じる」と言われるように、無所得・無所依の境地に住せずして住すべきことは、すでに『般若經』でも縷々説かれている。しかし今注目したいのは、李通玄が『解深密經』の「不空」という面を説明して「何法不_レ空。為_三智能隨緣照機利物故。」（同、七二二下）としている点である。「智」は衆生の機根を照らし出し、衆生を利益し濟度すればこそ「空ならず」（つまり「空に滯っていない」と言えるとして、「智」のはたらきである「悲（慈悲）」によって『般若經』の「空に滯る」ことを超えていく。

さらに李通玄は「第五時」の説とする『維摩經』について

述べる中で「此経破前四種教中（『小乗』、『般若経』、『解深密経』、『楞伽経』）菩薩声聞染浄未亡、常欣出俗。即以浄名身居俗土、明即俗恒真。壞彼浄相常懷染浄。」（同、七三六中）とする。「染浄」の二辺への拘泥と、出世間的、脱俗的な志向を退け、この俗世こそ「恒真」であり、「智」が「悲（慈悲）」と共に利他行を發起していく場であるとして「浄に滞る」ことを超える。そして『華嚴経』は「寂・浄」に「滞る」ことを越えた智慧円満なる菩薩のあり方を説く「一切諸仏自体理智大悲法界円満無限之乗」（同、七三二上）ということになる。

『般若経』にも当然ながら、例えば「勸学品」に「菩薩摩訶薩行般若波羅蜜、色是空受念著、受想行識是空受念著。舍利弗。是名菩薩摩訶薩順道法愛生。」（大正八、二三三中）として一切皆空の理に執着することを戒め、「無生品」には「今菩薩憐愍衆生、於衆生如父母兄弟想、如兒子及己身想、如是能利益無量阿僧祇衆生。」（同、二七一中）といった衆生済度への視線がある。しかし李通玄にとっては『般若経』が説く菩薩はあくまでも「楽空増勝」し、「但有二分慈悲増勝、未証法身仏性根本智等道理、但以空門而為所乘」（大正三六、七二二下―七二三上）と理解されている。このため李通玄はみずからの華嚴思想のベースに『般若経』の空観を据えながらも、「智」のはたらきとしての「慈悲」に、そし

「空・寂・浄に滞る」ということ（伊藤）

てその実践の場である「恒に真」なる俗世に大きな意味を見出した。そのことで『般若経』の「智」を「智慧円満」なる『華嚴経』的なそれへと止揚し、「空・寂・浄」を超えるという思想的課題に応えたのではないだろうか。⁽¹²⁾

四 李通玄と菩薩の行

李通玄が「寂・浄に滞る」と言う時、それは「智」（根本智・空慧）が開顯する出世間的、脱俗的な空寂なる境地に安住することを指していた。それは李通玄が一方では重視した『般若経』の「空」の世界である。『華嚴経』に立脚する以上、『般若経』が説くそうした「空」に「滞る」わけにはいかない。李通玄はそれを、空をも空じる無所得・無依住の徹底という『般若経』的なやりかたではなく、「智」のはたらきとしての「悲（慈悲）」と、それによる利他行の場である「俗世」を強調することで乗り越えた。そして李通玄においてそうした菩薩の行の具体的な内容は五位（住・行・向・地・十一地）の進修であり、十波羅蜜の修習である。⁽¹³⁾最後に、その五位、そして「空に滞る」ことを超えた菩薩の行道とはどのようなものか見ておきたい。李通玄はその行にもまた、「滞る」ことなかと戒めるのである。

（二）如是安立五位昇進之門……一令「發菩提心者不滞一法」而生懈怠。^甲（『新論』卷二一。大正三六、八八一下）

「空・寂・淨に滞る」ということ（伊藤）

（二）十住初心一念入道、生如来智慧家時、一切法総具。然法須安立次第昇進。不滞諸行故。（同、卷二七。大正三六、九〇六中）

（三）但為引接未得謂得、未至謂至、未滿云滿、滞染淨障、於菩提道及菩薩行有止足心、有休息想。安立五十重因果一百一十重法門、使不滞住止息休廢之心。滿普賢願行、至無尽極故。（同、卷三六。大正三六、九七〇上）

（四）如修道者、雖有擬成仏之意、多有滞一法、不知進修之路。（『決疑論』卷一之上。大正三六、一〇一三中）

ここでは初発心の一念に根本智が開顯、体得されるにもかかわらず、五位の行相を立てるのはなぜかを、李通玄は説明している。それは菩薩が特定の一つの修行に安住して怠惰に墮さないようにさせるためであり、諸行のそれぞれに留まることなく、営々と修行を続けさせるためだという。そして「未得謂得、未至謂至、未滿云滿」というような修行者が菩薩行において「止足心」「休息想」を起こさないように導くためだと。こうしていつしか「滿普賢願行、至無尽極」という境地にたどりつくことができたならば、「入法界品」で善財童子が最後に到達し得たように、「善財自見其身往詣十方十仏刹微塵数世界中、及到十仏刹微塵数仏所、明下会智境遍周也」（『新論』大正三六、九六三下）ということになるだろう。

しかし、そこまでは常に行にもその境地にも「滞る」こと

なく、前へ前へと進まなければならない。何とも迂遠な修行道に思われよう。しかしそこには、第十住、八地、十地に至つても「智」が開顯する「寂・淨」なる境地に安住し「止息休廢之心」に「滞住」しがちな（五欲への煩惱・習氣に劣らず）根深い人間の有り様への深い理解がある。そうした「滞住」を乗り越えて五位の進修に生き、常に自己を超出していく——そうした菩薩の飽くことなき前進とその勢い（モメンタム）の重視は、例えば法蔵の華嚴思想には見ることができない李通玄の華嚴思想の大きな特徴であると言えるだろう。

- 1 李通玄の著作は、『新華嚴經論』Ⅱ『新論』、『略釋新華嚴經修行次第決疑論』Ⅱ『決疑論』と略記する（いずれも大正三六）。『新論』については、志寧『大方廣佛新華嚴經合論』（『合論』と略記。新纂大日本統藏經第四卷）により、一部大正藏經のテキストを改め、また訓点を施した。『解迷顯智成悲十明論』（大正四五）にも「滞」の用例は三例ほどあるが、今回は扱わない。
- 2 大正藏經の「若不——以加行觀察力大願力」を『合論』（新纂統藏四、三九三中）により「一人」と改めた。
- 3 一切皆無名為法身。於此法身無作性海、体無一物唯無依之智。本自虛空性無古今。体自明白。恒照十方。無有本末方所可依、名曰根本智。（『決疑論』大正三六、一〇一五上）。昇此十住、空慧現前。一切心境、都無所得。（同、一〇一六上）。
- 4 ここでは「滞淨土」「滞淨刹」（大正三六、七二四中・下）など、俗世の彼方の淨土（への志向）に滞るという用例は除く。

浄土（への志向）に対する李通玄の立場については、拙論「李通玄における往生浄土思想批判」（『東アジア仏教研究』第一〇号、二〇一二年、八七—一〇四頁）を参照。

5 大正藏經の「和融出世間真俗二智」を『合論』により「和融世出世間真俗二智」（新纂統藏四、八六八下）に改めた。

6 根本智と初発心については拙論「李通玄による五種の初発心の説について」（『印佛研』五九（二）、二〇一一年、七一—七四頁）で論じた。李通玄の根本智・空慧については小島岱山氏の諸論考に詳しい。

7 本論では般若經典群一般を『般若経』とするが、引用には便宜上、羅什訳『摩訶般若波羅蜜経』（大正八）を使用する。

8 小島岱山「五台山系華嚴思想の特質と展開」（『華嚴学研究』第三号、一九九一年、一一六頁）、同「中国華嚴思想再構築への試み」（同、一五一頁）など参照。

9 吉津宜英『構築された仏教思想 法蔵』（佼成出版社、二〇一〇年、二二—二四頁）。

10 十宗と十時教は下記のとおり。（『新論』大正三六、七二二下、七三五下—七三六上）

〔明依教分宗の十宗〕——第一小乗戒経為情有宗／第二菩薩戒為情有及真俱示為宗／第三般若経為説空彰実為宗／第四解深密経為不空不有為宗／第五楞伽経以五法三自性八識二無我為宗／第六維摩経以会融染浄二見現不思議為宗／第七法華経会権就実為宗／第八大集経以守護正法為宗／第九涅槃経明仏性為宗／第十大方広仏華嚴経即以此経名一切諸仏根本智慈。因円果満一多相徹法界理事自在縁起無礙仏乘為宗。

〔明依宗教別の十時教〕——第一時説小乗純有教／第二時説般若破有明空教／第三時説解深密経為和会空有明不空不有教／第

四時説楞伽経明説仮即真教／第五時説維摩経明即俗恒真教／第六時説法華経明引権帰実起信教／第七時説涅槃経令諸三乗捨権向実教／第八時説華嚴経於刹那之際通摂十世円融無始終前後通該教／第九共不共教／第十不共共教。

11 『新論』（大正三六、七二二上）、『合論』（新纂統藏四、一三）や知訥『華嚴論節要』（韓国仏教全書四、七七〇中）、李贇『華嚴經合論簡要』（新纂統藏四、八三三下）は「第三般若教」とするが、方澤『華嚴經合論纂要』（新纂統藏五、二中）に倣い「般若経」とした。

12 なお、法蔵にも「不_レ著_レ法性者不_レ滞_レ寂也。」（『探玄記』大正三五、二四七中）「不_レ滞_レ空故不_レ同_二三乗_一」（同、二六四下）「滞_レ寂而失_レ悲」（同、四四七上）など、「滞寂」「滞空」「滞真」の用法や理解に李通玄と共通する面も見られる。しかしそれらが李通玄の場合のように、法蔵の思想において大きな意義を持つかどうか、現時点で筆者は懐疑的だが、今後の検討課題としたい。

13 拙論「李通玄における『華嚴経』『入法界品』十住位の善知識たちの理解」（『印佛研』五七（二）、二〇〇九年、一五六—一五九頁）参照。

〈キーワード〉 李通玄、空、寂、浄、滞、智

（佛教大学大学院修了・博士（文学））

「空・寂・浄に滞る」ということ（伊藤）